1　中立売橋(写真１)市電鉄橋土台(写真２・３)

◎　中立売橋の説明

平安時代には、正親町橋と呼ばれ、江戸時代には鶴橋と呼ばれていました。寛永３(1620)年、後水尾天皇が二条城に行幸されたとき、公儀橋として幕府が木橋を架けました。高欄擬宝珠付きのもので、その後、明治６年京都府がこれを石橋に改め今日に至っています。アーチの石材は、方廣寺大仏の蓮台の石垣が用いられました。

また、元和元年(1626)徳川和子の入内のとき、当時この橋を「戻橋」と呼んでいたため、「万年橋」と縁起の良い名に変えました。

◎　市電鉄橋土台の説明

昭和３６年に廃止された市電北野線の遺構を唯一残すのが、この鉄橋の土台です。北側が単線当時の土台で、南側が複線当時の土台です。北側の土台は明治３３年開通した堀川中立売から下ノ森間で使用されたもので、南側の土台は明治４５年北野まで延伸され複線化されたときのものです。

土台のレンガはイギリス積で隅は算木積みとなっています。

当時の市電のスピードは、人が走るのとあまり変りないのんびりしたものですが、そののんびりした市電で大きな事故があまりした。終戦直後の昭和２１年２月８日午後１１時頃、京都駅行きの市電が鉄橋から堀川に転落し、死者１５人、重軽傷者１３人という大惨事が起きました。原因はカーブで減速しなかったためですが、一説では運転台にいたのは酒に酔った進駐軍の兵隊だったということです。当時、北野にあった上七軒歌舞練場は進駐軍のダンスホールとして接収されており、連日、米兵で賑わっていました。

★　中立売通の説明

中立売通は、烏丸通から西へ一直線に六軒町まで約１．８キロあり、平安京では幅４丈(１２㍍)の正親町(おおぎまち)小路と呼ばれていました。正親町とは正親司があったところから通り名となりました。正親司は、「おおきみのつかさ」と読み、皇族の戸籍を扱う役所でした。

その後、「太閤秀吉公の御時、上立売、中立売、下立売の三筋ともに、呉服屋あり、絹布・巻物類を立売しける所なるゆえに、通の号となれるなり。」との記録があり、こり頃から中立売通と呼ばれました。

また、堀川通から西は広い中立売通ですが、市電が通るまでは、狭い通で新聞店の軒先で傘を差しながが立ち読みをしていると、その横が通りにくいほどの道でした。

ところが、明治３３年市電が通ることになり、南側の家の半分ほどを取り壊し、道路を広げ、市電を走らせました。その証拠に、中立売橋の北側の欄干から西を見るとほぼ、真っ直ぐに家の並びが見えますが、南側の欄干から西を見ると、ちょうど中立売通の中央付近が見通せます。中立売通の南側の家は、当時西行車線付近まであったことが分かります。

●　元河原歯科医院

●　鈴木医院(敷地約８０坪)

大正末期に、今の場所で開業した当主の祖父が昭和１４年西側の食品工業所を買取り洋館風の診療所を建て増ししました。１階は診療室ですが、２階は玉突きやパーティーのできる部屋となっていたそうです。

●　横山宅(敷地約１７０坪)

ベンガラ格子に駒寄せなど黒の外観、それに内部まで江戸末期の町家が大切に守られています。大正末期に当時の当主が織屋跡を買ったもので、玄関から３０メートル近い通り庭に沿って、店の間、小座敷などが続いています。

●　元牧野医院(敷地約１７０坪)

虫籠窓を持つ格子の町家、昭和１２年すでに建っていたこの家を当時の当主が購入し眼科医を開業しました。

●　藤田内科医院(敷地約１５０坪)

★　鈴木医院、横山宅、元牧野医院の三軒は、画家の三田村宗二氏がその著書「西陣　百家百住」の中で描いています。聚楽学区では、この他に「福井亭」・「塩芳軒」も描かれています。

★　この付近に医院が多いのは、戦国時代の医師、曲直瀬道三が新町通中立売下るに「啓迪庵」という医学校を建て、多くの人が医師を目指し勉学に励んだ。その名残で、中立売通には医院が多かったのですが、今では廃業、移転した医院も多いです。

● イヌイ星の子ハイツ

この付近では一番大きいマンションですが、明治時代には、「窮民授産所」が建てられており、生活困窮者に生活支援や、職業指導を行っていました。その後、明治１６年西陣地域の織物振興のため、西陣共進織物会社に払い下げ、さらに、福永織物工場、乾織物株式会社と変り、そして、昭和５５年、現在のマンションとなりました。

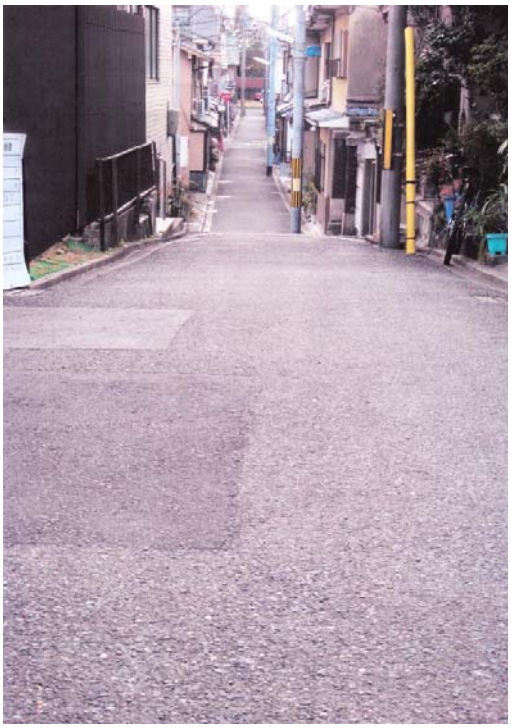
● 石碑・案内板(聚楽第址)

● 石碑・案内板（平安京大蔵省跡）

★ 正親小学校の校名の説明

明治２年上京十番小学校として創立され、その後、明治８年に校名を付ける時、校区のほとんどが聚楽第跡にあるため、校名を聚楽小学校と申請しましたが、一足先に東隣の上京第十六番小学校が「聚楽小学校」と改称しました。このため永く、校区が隣同士であるにも関わらず仲が悪かったといわれています。

２　土屋町通中立売下る(聚楽第外堀落ち込み)(写真４)



◎ この坂道は、古くから聚楽第外堀によるものと考えられています。森島康雄氏の「聚楽第復元図」によれば外堀は、土屋町通の東側、北側は落ち込みを下がった東側の路地の南側までとしています。

★ また、「京都府史跡勝地調査会報告書」に大正８年頃、土屋町附近の住民の記憶として、「明治３０年代頃まで、土屋町通下立売の北側附近に、幅数間の濠があり、夏には子供が水遊びをしていた。」と記されています。

3　松林寺前　石碑（聚楽第南外濠跡)(写真５)

◎　この付近は、もともと聚楽第遺構跡と言われていましたが、平成９年に発掘調査され部分的な外堀の一郭であったと推定されています。山門前の道路（新出水通）から本堂にかけてなだらかな坂となり、さらに墓地にかけて一段と低くなっています。

そして、山門前の道路から北の出水通を見るとさらに傾斜していることが分かります。さて松林寺は、通称やす寺（安産の安から）と呼ばれる浄土宗鎮西派のお寺です。元禄年間（1688～1704）に二条河原町から移転しました。当初は、婦人病や安産の薬を販売していました。

また、幕末には京都見廻組の与力、佐々木只三郎が寓居していたと言われています。慶応３（1867）年、近江屋での坂本竜馬、中岡慎太郎暗殺に関与していたとも言われており、ここから近江屋に向かったのかも知れません。

● 鵲弘法大師堂

その昔、松永稲荷前の路地の井戸から大日如来像が引き揚げられ、以来、お祀りしているそうです。

４　松永稲荷前　石碑（聚楽城鵲橋乃旧跡)(写真６・７)

◎　聚楽第南二の丸南堀の東側に位置するのが鵲橋です。鵲はカラス科に属し、カラスより少し小さい鳥です。佐賀県の県鳥となっています。七夕伝説では、織姫と彦星が一年に一度だけ逢える７月７日、銀の川が雨で渡れなくなったとき、鵲が翼を広げ橋を架けた話に登場します。男女を結ぶ橋の意味で和歌や小倉百人一首にも出てきます。現在でも池などの端に架ける食い違いの延石２枚組を鵲橋といいます。

この付近は大正６年頃までは杏畑が広がった牧歌的な場所でした。４月の初めピンクの艶やかな花が咲き、多くの人が訪れたといいます。また、昭和１０年頃までは榎の大木があり、松屋町通を幅１メートルほどの小川が横切り、魚が泳いでいたそうです。その名残が、松永稲荷の南側です。

そして。昭和３６年の下水道工事のとき、松屋町通の東側から多くの石の欄干や擬宝珠が地中から出てきました。

5　梅雨の井らしき跡(写真８)

◎　永く聚楽第内の井戸（梅雨の井）とされていましたが、最近の調査で井戸の位置が堀の中であることが分かり、公式な文書からは削除されました。この付近はバブル末期の平成２年、八雲神社、梅雨の井周辺の土地が不動産業者の手に渡り、２月には敷地内のあった八雲神社本殿が取り壊され、神木のもちの木も切り倒されました。これにより、地元住民が中心となって、梅雨の井を守る会が発足し、今日に至っています。

★　ハローワーク工事中の話

平成４年工事中、金箔瓦等６００枚が発掘されました。いずれも重要文化財に指定されました。そして、聚楽第本丸東堀肩口と推定されました。

●　石碑(聚楽第址)

西側の岡本さんが個人で建てられたものです。

6　名和公園　石碑（贈正三位名和君遺蹟碑）（此処名和長年戦死之地）（贈従一位名和長年公殉節之所）（写真９）

◎　名和長年は、南北朝時代南朝の武将で、後醍醐天皇に忠誠を誓った一人です。建武３（1336）年足利尊氏軍との内野の戦いで敗れ戦死しました。その場所がこの付近とされており、明治時代に整備されるまでは、古戦場跡として「ちょう念塚」と呼ぶ古墳があり、人が住むと祟りがあると言い伝えられていました。

「贈正三位名和君遺蹟碑」　明治１９年　１月　書　太政大臣三条実美
「此処名和長年戦死之地」　昭和１１年１２月　京都市教育会
「贈従一位名和長年公殉節之所」　昭和１４年　３月　書　海軍大将有馬良橘

● 案内板（平安京一条殿院跡）

● 案内板（平安京一条大路跡）

★ 百鬼夜行の話

平安京のころ、一条通に架かっていた橋は、内裏の北東、つまり鬼門となり、夜になるとここから一条通を百鬼が行き交い、俗に言う「百鬼夜行」が毎日のようにあり、安倍清明も「何度も見た」との記録があります。

● 石碑（黒田如水邸跡）

黒田如水は、安土桃山時代の武将で、はじめ姫路城を預かっていましたが、中国攻めで下向途中の豊臣秀吉に従い毛利攻めなどで活躍したのち、聚楽第の東北部に邸宅を建てました。

7　旧一条戻り橋土台(写真１０)

●　案内板

◎　戻り橋という名の橋は、平安時代に存在したことは間違いありません。和泉式部の和歌に「いづくにも　帰るさまのみ　渡ればや　戻り橋とは　人のいふらん」という句があります。ただし、応仁の乱の頃の地図には、「戻り橋は南一町」と書かれており、今の中立売橋のことを指しています。しかし、一般には一条通に架かっているこの橋を戻り橋といっているので、ここで、橋そのものの歴史を見てみると、明治時代の写真には、木製の橋が写されており、記録では大正１１年に鉄製の橋に変り、昭和２７年に鉄筋コンクリートの橋に架け替えられ、平成７年に現在の橋になりました。ただし、この時、橋の位置を南に移動し、拡幅されています。

現在の橋の北側にある石積みの土台の上に明治から平成７年まで橋が架かっていました。大正１１年鉄製の橋に架け替える工事をしていたとき、土台の下から石棺が出てきたのですが、当時は迷信を信じる時代でしたので、安倍清明が式神を閉じ込めた石棺ではないかと大騒ぎなり、そのまま埋め戻したそうです。

また、昭和４５年当時の記録で、右京区花園八ッ口町に住む、住野さんという家の庭に高さ１メートル、幅２０センチの石柱があり、それぞれに「一条」、「戻橋」と彫られ、天正１０年の銘があり、豊臣時代の戻り橋の親柱ではないかと言われていました。